

小説教材で漢文と向き合う

——中学校における漢文授業の試み——

中山 大輔

一、はじめに

平成二十四年版中学校学習指導要領より、それまで「言語事項」とされていた部分が「伝統的な言語文化」と国語の特質に関する事項」と改められた。内容でしか書かれてこなかった「伝統的な言語文化」という言葉を項目名に入れてくることから感じられるのは、「伝統的な言語文化」である古典を今までよりも重視する姿勢である。また、小学校段階から伝統的な言語文化としての古文・漢文が取り上げられることとなった。これによって小・中・高を通じて、段階的に古典を学ぶことができるようになったと言える。

ただ、古典は今まで小学校では取り上げてこなかったことから、どのような学習を行えばよいのかというところとまどいがあるだろう。また、中学や高校では、逆に今までの学習とどう変えていけば良いのか困惑する面もあるだろう。

現在、中学の教科書では基本的に書き下し文と現代語訳が訓点付きの原文とともに掲載されている。そこでは、多くの

場合に本文の音読を主にして授業が展開され、故事成語であれば教科書に掲載されていない故事成語についての調べ学習などが発展学習として行われているだろう。それが高校の教科書になると、訓点付きの原文のみになっていく。従って高校の授業では、生徒は脚注を参考にしながら漢和辞典などを使って現代語訳を行うということが主になっていく。

中学校の学習では、ふつう漢和辞典を用いることはなく、教科書にはあらかじめ訳が掲載されている。中学校では訳が掲載されており、高校では原文のみであることから、中学では漢文というよりも現代文に近い授業となり、高校では生徒が漢文に向き合い取り組んでいると考えられる。しかし、実際に生徒が自分の力で現代語訳に取り組んでいるかといえば、そうではない場合もあるだろう。例えば、わからない漢字をただ漢和辞典で調べて、でてきた意味をそのままノートに写しておくというだけで終わる場合も多いのではないだろうか。その場合、自分の頭で思考しているとはいえず、単なる機械的な作業ともいえるだろう。

そこで、小学校から古典に親しんできた生徒が、高校でより積極的に漢文を学習するために必要な力や態度を身につけるには、中学校ではどのような授業が可能であろうか。

今回、筆者が勤務する私立東山中学高等学校で年に一度行われる研究授業の担当になったのを機に、以上のような問題意識から漢文の小説教材を用いた授業実践を試みることにした。本実践は中学2年C組で行った。当クラスはユリーカコースと言いい、20名前後の少人数制のクラスである。

二、漢文と向き合わせるために

生徒に生徒自身の頭で考えさせながら漢文を読み解かせるには、何が必要であろうか。まず、教材について考えたい。

生徒が自分の知識で漢文の文章と向き合うには難解な漢文を用いることはできないだろう。一方で、単に平易なものであれば、考える作業が少なくなり、生徒にとって退屈なものとなってしまう恐れがある。難解でないという意味では文法が平易で、書き下し文にすれば現代の日本語の意味に近いものでなければならぬ。また単に平易でないという面では、文中に漢字一字では意味がわかりづらいが、二字熟語にする

ことによって意味を類推することができる語が入っているものを選択する。生徒が読みやすく、内容を理解しやすい教材を用いることによって、生徒の興味関心を喚起することができるだろう。また同時に生徒の学習意欲を引き出せるような、生徒が考えなければ理解ができない部分も持ち合わせた教材を用意することによって、中学生でも漢文と向き合い、理解することができるようではないだろうか。

次に指導について考えたい。従来の教師主導の漢文の授業では、実際に生徒が漢文について向き合っているかどうかがつまみづらい部分があるため、まず生徒一人一人に現代語訳に挑戦させる。この時には、誤訳をしてしまっても注意はせずに、生徒一人一人が現代語訳を行うように促すだけにとどめる。その後、班を作り、自分たちの訳を発表させ、班の中でより良い訳を作らせる。班による話し合いを行う理由は、他者の自分とは違う解釈を聞くことによって、改めて漢文を見直して考える機会を作るためである。その中で、自分とは違う解釈を聞くことによって、改めて漢文を見直したり、誤訳に気づいたりする生徒がでてくるのではないだろうか。

班の訳をまとめた後は、班毎に訳を発表させて、クラス全体で一番良い訳を作る。一人で漢文に向き合う時間と、班の

中での話し合いにより改めて漢文に向き合う時間を作り、そうしてより漢文に対する自分なりの理解を深めた上で、再度他の班の違う解釈などを味わうことによって更に漢文に向き合う時間を作り、新たな気づきを生徒一人一人にもたらしことを狙いたい。そして、最後に授業者による解説を行うことによって、生徒同士とは違う視点から漢文に向き合う時間を作る。このような指導計画によって全部で四回教材と向き合う機会を生徒に与えることができる。

以上の指導を行うことを踏まえ、教材として『蒙求』に収める「董永自売」という話を用いることとした。

三、『蒙求』「董永自売」について

『蒙求』は五代の後晋の李潜の著で、古書の中から古人の逸話を類集し、四字句の韻語を標題として、配列し、記憶しやすいようにした初学者向けの教科書である。日本には平安時代に中国から伝えられ、当時の人々の間で盛んに読まれたと言われている。『蒙求』の文章は、非常に短くまとまっています、句法文法も平易なものが多い。

従来の教科書の教材では、『蒙求』を出典とする文章を教

材としているものは「古典」の教科書が主である。しかし、短くまとめられ、物語の流れがわかりやすい蒙求の文章は、漢文訓読に不慣れた生徒にとつて、内容の面から理解しやすい教材になることが考えられる。また、文法が苦手な生徒に対しては、習熟度合いに応じて現代語訳をつけるなど対応すれば良いだろう。

本実践では、この『蒙求』の中から、物語の流れがわかりやすく、難解な部分が少ない文章である「董永自売」の話を選んだ（資料1）。

『蒙求』における「董永自売」以外にも、同様と思われるものが『搜神記』巻一にも収められている。『搜神記』に収められている話では、喪に服す時間が三年間であったり、主人と董永の会話があたりと、より具体的な話となっている。しかし、その分、字数が増え、文章が複雑になっている部分や、中学生には身近ではない漢字も見られた。中学生自身が自分の力で漢文と向き合う、そのことに重きを置いていたのが今回は『蒙求』の「董永自売」を用いることとした。

・あらすじと場面展開

幼い時に母を亡くした董永が、父の葬儀の資金を作るため

に自らを奴隸として売る、それに感動した天が董永の為に一人の天の織女を遣わすという話である。場面ごとに分けると四つの場面に分けられ、それぞれの場面を要約すると次のようである。

第一場面は、主に「董永の生い立ち」について述べた部分で、幼い時に母を亡くした董永が、足が不自由な父の面倒を見ながら、雇われて耕作を行いながら生計を立てていることが述べられている。

次に、第二場面は「董永の父の死と自らを売る董永」について述べた部分で、父が死んだ後、董永が父の葬儀の資金を作るために自らを奴隸として売るまでのことが述べられている。

第三場面では、物語の転換として「不思議な女性との出会いと奴隸からの解放」について述べた部分で、董永が父の葬儀を終えた後、一人の女性と出会い、二人は結婚する。雇い主のところで妻は驚異的な速さで仕事を行い、無事に董永は借金を返し、奴隸から解放されるところまでが述べられている。

最後に第四場面は、「妻の告白」について述べた部分で、妻が董永の孝行に感動した天帝により、董永を助けるために

遣わされた天女であることを明かし、天に帰っていく様子が述べられている。

四、小説を教材化する価値と留意点

今回取り上げた「董永自売」は、小説のジャンルに属する作品である。その内容は、父の葬儀の資金を作るために自らを奴隸として売るといふ、現在では考えられない行為を話の特徴として持っており、また、「董永の生い立ち」「董永の父の死と自らを売る董永」「不思議な女性との出会いと奴隸からの解放」「妻の告白」という風に場面がはっきりと分かれており、物語の流れをつかみやすくなっている。ただ、ストーリー自体は平易だが、主語の省略と展開の飛躍が見られる。具体的には、第三場面における女性との出会いと結婚に至る過程である。なぜ妻にしてほしいといったのか、どういう経緯で董永が女性を連れていくことにしたのかについては全く書かれていない。ここについて、生徒に中国の古小説において話の主眼ではない部分について省略が起こることを説明する必要がある。

文法面で見てみると、返り点はレ点、一二点で構成されて

いるので、基本的な書き下し文のルールを確認するのに適している。また、本文中に「傭」「奴」「辞」「凌」という風に、一字のみでは意味がわかりづらいが、「傭兵」「奴隸」「送辞」「凌駕」などの熟語から本文中で用いられている意味が類推できるものがある。同時に、現在では使われない漢字も多く見られる部分があるので、そのまま生徒に提示すると混乱を招く恐れがある。難解だと思われる部分については日本語訳や注を補足しておく。

一般的に中学生の段階では、親に見守られている存在であり、両親のために身をなげうって何かを行ったことがある者は少ないだろう。それだけに、自分の父の葬儀のために自身を売るという行為は、現在の中学生にとっては信じられないものにうつるだろう。肉親のためであるうが、他者への自己犠牲について学習することは現代を生きる生徒にとって価値があるのではないだろうか。

また、天女が絹を織ることによって、董永を救うという話の展開は日本に古くから伝わる民話「鶴の恩返し」を思い起こさせ、生徒にとって身近に感じられるだろう。しかし、「鶴の恩返し」では助けられた鶴が機を織るのに対して、「董永自売」では天帝より遣わされた天女が絹を三百匹織るのであ

る。信じられない速さで絹を織るということもさることながら、天女が自ら絹を織って董永の借金を返す行為は、生徒にとって考えさせられるものがあるものだろう。

五、研究授業について

a 単元構成と目標

研究授業に当たって、全四時間で単元を構成した。

指導計画（全4時間）

第一次「董永自売」の音読と書き下し文の作成

・・・1時間

第二次「董永自売」の音読と書き下し文を

用いた現代語訳・・・1時間

第三次「董永自売」に関する班での話し合い（研究授業）

・・・1時間

第四次「董永自売」のまとめ

・・・1時間

研究授業を含む四時間の授業を通して、生徒に経験させたことは、漢文と向き合うことである。一時間目と二時間目は生徒一人一人が個人の力量を用いて、漢文を書き下し、現

代語訳する時間である。三時間目は、他者との交流を通じて漢文の現代語訳について再考し、そして、各班の発表を通して様々な解釈を知ることによって、改めて自他の漢文の捉え方の違いについて考えることを狙いとしている。最後の四時間目の解説は、教員による「董永自売」の現代語訳の解説や漢文の現代語訳の方法に関する解説を通じて、改めて漢文の読み方について学ぶ時間である。

つまり、自分の頭だけで漢文を訳す時間、話し合いや班の発表を通じて他者の考えを受けて見直す時間、そして教員の解説を通じて知識を得る時間というふうに、それぞれ別の視点から漢文について考える時間を持たせることを狙いとしている。

b 第一次 音読と書き下し文の作成

一時間目については、まず音読から行った。教師による範読と生徒に音読させることによって書き下し文の補助を狙いとした。書き下し文を行う上での注意点として、「助詞・助動詞はひらがなで書く」「送り仮名もひらがなで書く」「置き字は書き下し文に含めない」という三点だけを挙げておいた。頭著であったのは、一レ点の学習が不十分である生徒が見ら

れたことである。また数名ではあるが、指示語である「之」を、名詞であるのにも拘わらず、ひらがなで書いている者も見られた。

授業では、基本的には間違っている箇所を指摘せず、間違っていることだけを指摘し、書き下し文を行うように指導した。これは、生徒自身が書き下し文のルールをしっかりと把握するためであり、あえて指摘しないことによって、生徒自身が文法をより意識して、原文について考えることを狙って行った。一時間の間に全員が本文を正しく書き下すことができた。

c 第二次 漢文と向き合うⅠ

—自分の力で現代語訳を作る—

二時間目についても、まず音読から行った。そして書き下し文を基にして、一人一人に現代語訳を課した。この時には、生徒同士の相談などは行わず、分からない時のヒントとして、分からない漢字から二字熟語を考えだし、そこから意味を類推するように指示した。一時間目の書き下し文の指導とは違い、生徒が誤訳していることがわかっていても、指摘することはしなかった。生徒個々人に解釈を委ねることで、多

様な解釈を生みだし、他者との交流から漢文を見直すことを目的とした三時間目における話し合いが有効に行われるようにするためである。

また、本文の中から辞書で意味を確認したい一字を選ぶように指示した。これは生徒が漢字一字一字をしつかりと考えることを狙いとして行った。もし、何文字でも調べて良いというふうにすれば、生徒自身、分らないと感じればすぐにその漢字を調べようと考えてしまうだろう。しかし、一文字だけに限定することによって、その他の漢字を自分の力で訳さなければいけない状態になるので、より漢字に対して考える時間が増えることになるだろう。

実際に現代語訳を行わせると、授業者が与えた二字熟語について生徒の訳に揺れが見られた。「傭力」を「力」の部分だけに注目して「力いっぱい」という風に訳している者もいれば、こちらが想定した通りに「やとわれて」という風に訳している者も見られた(資料2―a)。また、漢字そのものではなく、文脈から類推してより内容が分かりやすい訳を行う生徒も見られた(資料2―b)。だが、「辞」「凌」に関しては、中学生には難しかったためか、うまく訳を作ることができなかったようであった(資料2―c)。

また、授業者が全く想定していなかった部分として大きく目立ったのが「身を売^りて奴と為^らんことを約す」という部分を、「奴隷にならないことを約束した」というふうに訳した生徒が見られたことである(資料2―d)。この訳では董永が奴隷にならないと捉えていることになり、「董永自売」というタイトルと矛盾することにもなる。これは「為らん」の「ん」を口語と同じように打ち消したと捉えたために起こった誤訳だろう。まだ文語文法の助動詞を学習しておらず、口語文法と文語文法を混在して考えていることがうかがえた。

d 第三次 漢文と向き合うII

―他者との交流から漢文を見直す―

第三次が研究授業であり、この時間では班での話し合いと発表を行った。音読を行った後に、話し合いが行いやすいように四人班に分け、教師の指示で「司会」「書記」「発表」「板書係」の四つの役割を与えた。教師が役割を指示した理由は、役割自体を話し合わせることによって時間を消費することを避けたことと、人前での発言が苦手な生徒が発表にならないように配慮したためである。また四人班にしたのは、それ以

上少ない人数にしてしまうと班の発表に時間がかかってしまい、話し合う時間が少なくなってしまうためである。逆に人数を多くしてしまうと、班の中での話し合いの時間が不十分になる恐れがある。

二時間目の現代語訳で誤訳した者が見られた「為らん」の部分に関しては、班の話し合いの中で改めて本文の文脈と照らし合わせた上で、自分が誤っていたことに気づくという場面が各班で見られた(資料2—e)。他者の意見を基にして漢文と改めて向き合うという姿勢がここからうかがえる。

また、現代語訳をまとめられた班の中には、難解な漢字についてどういう意味が当てはまるのか四人で活発に話し合う場面も見られた。特に「辞」について、「言葉」という意味だと取る者と「謝る」という意味として取る者があり、班の中でどちらの意見がより本文と合致しているか話し合っていた。その班では、女性が董永のもとから去っていくことを重視して、「謝る」という意味合いで取ることになっていた。

一人一人がそれぞれ漢文の内容について考えることができた上での話し合いであるので、自分の意見や考えをそれぞれ持っており、そのため話し合いが活発に行えたのだろう。

調べたい漢字として各班があげていたものは「辞」が二班、

「凌」「至孝」「傭」が一班ずつである。「至孝」に関しては二字であるが、班のなかで、この二字がまったく想像できなかったのであろう。班員の四人とも「孝」の字から「孝行」という言葉を想像できていない様子であった。そのため、この班だけでは、まったく分からない言葉としてこの二字を選んだのだろう。結果的には、すべての班が二字熟語から意味を考える必要がある漢字を選ぶ結果となった。

また、最後に班ごとに発表を行なった。「板書係」の役割を与えられた者がここで各班の訳と自分の現代語訳との相違について確認を行った。時間に余裕があれば、「板書係」が自分の班の訳について板書を行う予定であったが、話し合いに時間がかかった班があり、今回他の班と自分の班の訳に相違がある場合にプリントに書き込むという役割だけに終わってしまった。ここでの発表でもまた自分の班との違いや、自分の訳との違いを知ることによって生徒が本文について改めて考えていることがうかがえた。

ただ、前述のように、時間が足りなくなってしまったために各班が考えた調べたい漢字について実際に辞書を引く作業を行う余裕がなかった。そのため、最後にこちらから本文の意味内容に合う二字熟語を紹介し、漢文を読む際に自分の知

識を活用することの大切さを伝えて授業を終えた。

e 第四次 授業者による補足とまとめ

四時間目では、各班の現代語訳の確認を行ってから、現代語訳を行った。その際に、二時間目に誤訳を行っていた者がいることもわかつているので、班の話し合いの中で誤訳に気づいた者の感想を聞きながら、授業者が全文を訳していった。従来であれば、授業者が主体となり進めていくのだが、ここまで生徒主体で行ってきたので、生徒の漢文に対する反応を意識しながら授業を行うことができた。

六、生徒のアンケートより

今回授業終了後に生徒にアンケートを行った。

- 1 この授業で勉強になったこと
 - 2 教材の良かったところ
 - 3 教材の難しかったところ
- の三点である。それぞれの項目についての生徒の感想を一部紹介したい。

まず、1の「この授業で勉強になったこと」については、「タ

イトルをふまえて文章を読むと訳し方がわからない時の参考になる。今回の場合、「董永自売」なのに、奴とならないと訳すのは間違っていることに気づけなかった。」「自分でわからない漢字の意味を熟語から類推することを学び、難しい漢字の意味を辞書を引くことなしにわかる方法がわかった。」「みんなで話し合って、正しい口語訳を作っていたので、みんなで話し合うのは大切なことだと思います。また、書き下し文、口語訳の順に訳したり、二字熟語にして意味を考えたりすると文の意味が良く分かることが分かった。」といった意見がみられた。

1の感想からは、生徒にとって貴重な経験が生徒自身の気づきにつながったことが窺える。口語訳で顕著であった口語文法と古典文法の混在による間違いから、タイトルの重要性に生徒は気づいている。この気づきは文章を部分だけで読むのではなく、本文全体の展開や文脈を意識して読むことにつながっていくだろう。

また、熟語から類推することの大切さ、そして話し合いの有効性について指摘する生徒の意見が多数を占めた。

2の「教材の良かったところ」については、「董永が自分を売ってまでして亡くなった父を葬ったところ」「内容が分

かりやすく、原因・理由・結果が分かりやすかった」「婦人が董永のために絹を三百匹織ったところ」といった意見がみられた。

小説ということでストーリーの分かりやすさに着目した感想や、董永の自己犠牲の精神に触れている感想が多く見られた。

3の「教材の難しかったところ」については、「物語の最後のところが難しかった」「口語訳するときに難しい単語があると、出来ないで大変でした」「辞の意味を理解するのが難しかった」といった意見がみられた。

現代語訳に苦心した生徒の率直な感想が多く見られた。熟語から類推するという指導をするのは、はじめてだったので、とまどったことがアンケートからもうかがえた。

七、成果と今後の課題

今回、中学校では普通行われないであろう生徒による漢文の現代語訳に挑戦した。教師による解説の前に、生徒自身による現代語訳だけでなく、班での話し合いをいれたことで、より生徒が漢文と向き合うことができたといえるだろう。一

文字の漢字が本文中でどのような意味として用いられているかについて活発な話し合いも行われ、意味が正しいか否かという問題よりも、漢文の一字に対して生徒が自分たちの知識だけで考えることができたことが成果といえるのではないだろうか。

また、教材を小説から選んだことも生徒の気づきを得るのに大きな役割を果たしたことが考えられる。人間の深みであったり、思想の高さであったりを伝えることに重きをおいている史伝や思想のジャンルとは違い、ストーリー性を持って読みやすい上に人間の愛情が主題となっている小説教材は、生徒が理解しやすく、また興味・関心を引くきっかけになるだろう。そういった意味では、研究授業において小説である「董永自売」を扱い、生徒の興味・関心を引き、現代語訳しやすい状況を作ることができた点は、大きな成果といえるだろう。

だが、書き下す力の向上という面からみれば課題が残るし、また「辞」や「凌」という漢字は中学生には難解だったことがうかがえた。漢文導入期ともいえる生徒に対して「董永自売」を扱う場合には、内容面の理解からは問題はないが、今回見えてきた躓きやすい漢字に関しては、注を留意したり、

事前に日本語にしたりしておくなどの配慮が必要だろう。

また、熟語から類推するという考え方は、一回の授業で身に付くことではないだろう。今後の授業でも、さまざまな場面と同じように熟語から意味を類推させていき、生徒にとつてまず自分の力で漢文と向き合うのが当たり前という姿勢を見につけさせておく必要がある。

高校での漢文学習につながる授業を意識して授業を行った。結果、成果と課題がそれぞれ見えてきた。中学生であっても、教材を工夫すれば漢文の現代語訳に取り組むことは十分可能であるし、また興味関心を喚起することもできることがわかった。ただ、その教材の難易度次第では、生徒に漢文に対する抵抗を生み出すことも十分考えられる。

学習指導要領の改訂により、小学校で漢文を学習することになり、高校への発展をどう意識して中学の漢文学習を行うかが今まで以上に重要になっていくだろう。小学校と同じような内容で授業を行えば、生徒の理解が深まる利点もあるが、変化がないことから興味関心を削ぐことにつながりかねない。また、小中高での学習に関連性がなければ、生徒に漢文学習に対するとまどいが生まれるだろう。小学校での漢文学習を活かしつつ、高校での漢文学習に関連した授業や教材を

意識して中学で授業を行うことにより、生徒にとつて一貫した学習を行うことができるだろう。今後新たな教材を探すとともに、既存の教材を用いた新たな指導法を探索し、生徒にとつてより良い漢文学習を模索していきたい。

(主要参考文献)

- 謡口明『生徒に興味・関心を持たせる教材の発掘』(『新しい漢文教育』
第1号、全国漢文教育学会、1986)
鎌田 正『漢文教育における理論と指導』(大修館書店 1972)
長谷川 滋成『漢文教育論』(青葉図書 1984)
南本 義一『国語科漢文教育論』(溪水社 1986)
早川光三郎『蒙求上』(明治書院・新釈漢文大系、1973)
李 剣国輯校『新輯搜神記』(中華書局 2007)
先坊幸子・森野繁夫編『搜神記』(白帝社 2004)
(東山中学・高等学校)

資料 1

授業で用いた「董永自売」の原文と書き下し文、現代語訳は以下の通りである。原文などには便宜上場面ごとに①～⑩の記号を付した。

原文

①漢董永少失母養父。家貧傭力。至農月、以小車推父、置田頭陰樹下而傭農作。②父死。就主人貸錢一万約売身為奴。遂得錢葬父。③還於路忽遇婦人。容姿端美。求為永妻。永与俱詣主人。永妻織纈、三百匹放汝夫妻。乃織一月而畢。主人怪其速、遂放之。④相至隨旧相遇所。辞永曰「我天之織女也。縁君至孝、天帝令助君償債。」言訖凌空而去。

書き下し文

①漢の董永^{わかな}少くして母を失い父を養ふ。家貧にして傭力す。農月に至れば、小車を以て父を推し、田頭陰樹の下に置いて農作を傭む。②父死す。主人に就いて錢一万を貸り身を売りとて奴と為らんことを約す。遂に錢を得て父を葬る。③還るとき路に於いて忽ち婦人に遇ふ。容姿端美なり。永が妻と為らんことを求む。永与に俱に主人に詣る。永の妻をして^け織を織

らしめ、三百匹にして汝夫妻を放さん、と。乃ち織ること一月にして畢^はる。主人其の速^{すみ}かなるを怪しむも、遂に之を放す。④相隨ひて旧相遇ひし所に至る。永に辞して曰く「我は天の織女たり。君の至孝に縁り、天帝君を助けて債を償はしむ、と。言訖^まはり空を凌いで去る。

現代語訳

①漢の董永は幼い時に母に死に別れ、父を養っていたが、家が貧乏だったので、他人に雇われて働いていた。農繁期には小さい車に父を乗せて押して行き、田のほとりの木陰に車を置き、父を見守りながら農作に従事した。②しばらくして父が死んだ。けれども葬式の費用がなかったので、彼は雇い主の所に行き錢一万を借り、その代わり自分の身を売って奴隷となることを約束し、遂に錢を得て父を葬ることができた。③葬式の帰りの路上で、ふと一人の女性に出遇った。その女性^はは容姿うるわしく、その上彼の妻になりたいと申しこんで来た。そこで彼は共ども主人の家にいった。主人は彼の妻に絹三百匹を織らせ、それが済んだらお前たち夫婦を奴隷から許してやろうといった。そこで妻は機を織り始め、わずか一ヶ月で三百匹織り上げてしまった。主人は余りの早さに不思議

議に思いながらも、約束したので、夫婦の身分を自由にしてやった。①二人が一緒に連れ立ち、初め出会った所に来ると、妻は彼に別れを告げて、「私は実は天界の織女です。あなたがあまりに孝行なので、天帝が私を遣わし、あなたを助けて負債をつぐなわせたのです」といい、言い終わると空に昇っていった。

資料2

以下は、実際に生徒に記入させたプリントである。三段に分かれており、上段で原文を示し、中段には生徒に書き下し文を、下段には現代語訳をそれぞれ行わせた。

2-1 a 第一場面の記述例

I	漢の董永少失母	漢の董永は小さい時に母を失ひ父を養つた。家は貧しかた
養父家貧。備力。至二農月、以二小	養父の家は貧乏で、備力（備力とは、農具や道具のこと）で、至二農月（至二農月とは、農作の季節）で、以二小	養父の家は貧乏で、備力（備力とは、農具や道具のこと）で、至二農月（至二農月とは、農作の季節）で、以二小
量推（父）置二田	量推（父）置二田	量推（父）置二田
顯陰樹下一而營二農	顯陰樹下一而營二農	顯陰樹下一而營二農
作。	作。	作。

「備力」を「やとわれて仕事をした」と訳しており、「備」の意味をきちんと捉えていることがうかがえる。

2-1b 第三場面の記述例

遇^{アツ}婦人^ニ。容姿^ハ端^ニ美^{ナリ}。	美。	織^ハ一月^ノ而^ハ畢^ス。	人^ハ怪^シ其^ノ速^ニ。遂^ニ放^ス之^ヲ。
婦人に遇ふ。容姿端美なり。	織ること一月にして畢はる。主人其の速やかなるを怪しむも、遂に之を放す。	織りつづけて、一ヶ月で終わる。主人はあまりにも速いのを怪しいと思つたが、と婦を開放した。	婦人に会つた。見た目はとても美しい。

「端」を「とても」と訳していることや、「其の速やかなるを」というところを「あまりにも速いので」と訳している所から、この生徒が話の流れを踏まえて漢文を訳していることがうかがえる。

2-1c 第四場面の記述例

辞^シ永^ニ曰^ク「我^ハ天^ノ之^ノ織女^也。縁^ニ君^ニ至^ス孝^ニ。	一、天帝^ノ令^ニ助^ス君^ノ償^ハ。	「償^ハ。」言^ハ訟^ス凌^ス空^ニ而^テ去^ル。
永^ハ曰^ク「我^ハ天^ノ之^ノ織女^也。縁^ニ君^ニ至^ス孝^ニ。	天帝^ノ令^ニ助^ス君^ノ償^ハ。	「償^ハ。」言^ハ訟^ス凌^ス空^ニ而^テ去^ル。
婦人永^ハ曰^ク「我^ハ天^ノ之^ノ織女^也。縁^ニ君^ニ至^ス孝^ニ。	天帝^ノ令^ニ助^ス君^ノ償^ハ。	「償^ハ。」言^ハ訟^ス凌^ス空^ニ而^テ去^ル。

「至孝」を「親孝行」、「償」を「借金」、そして「令」を役に訳している。ただ、「辞」に関しては、うまくつかめなかったのか、訳ではなく書き下し文をそのまま書いている。

2 | d 第二場面の記述例

②死。就主人。 貸一萬。約二売。 身為奴。遂得錢葬父。	父死す、主人に就いて、 錢一萬を貸與り、約二を 賣り、身を買ひ、父を葬 つた。遂に錢を得て、父 を葬つた。
	父が死んだ。主人に就いて 一萬圓を貸與り、二の身を買 ひ、父を葬つた。遂に金を得て、父を葬つた。

「為らん」を否定文として訳している。本教材のタイトルや話の展開から考えれば、否定文ではおかしいと分かる。だが、慣れない漢文の授業ということで、そこまで考える余裕がなかったのだろう。

2 | e 四人の班によつて一つの訳を完成させた例

師し舎りプリント ○司会 () ○書記 () ○発表 () ○板書 ()	○四人は三人の班の班長を兼ねて、一番正しい班長を選び、 一ペシ漢の董永は幼くして母を亡くし、父を養育した。 家は貧しいので、やとられて働いた。農業の季節に なると、小車に父を乗せて畑のほとりにある樹の下に置いて、曲を作をした。 身をやて	三人父が死んだ。主人に仕えて、一万を貸し、奴隷とな ることを約束した。遂に錢を得て、父を葬つた。	三人婦人にあう。汝がとても美しかった。 一ヶ月で織るのを終えた。主人はあまりにも速いので、 怪しんだが、遂に董永を解放した。 四ペシ董永に(お)言。た。私は天の織女です。君の孝行にお 天帝は君を助ける事だ。借金を償ってやれと言。お出 た。と言。い。終。れ。ると。空に消えていった。	漢語訳書「西漢書」一「辞」
---	---	---	---	----------------------

上述の「為らん」を否定文として訳した生徒も、この中にいるが、最終的には肯定文として訳していることがうかがえる。